

博士（文学）佐藤彰一氏の『修道院と農

民——会計文書から見た中世形成期口

ワール地方——』に対する授賞審査要旨

佐藤彰一氏はヨーロッパ中世初期の歴史を主たる研究領域とする日本では数少ない本格的な研究者として知られる人であり、本書『修道院と農民』（名古屋大学出版会、一九九七年、本文六五九頁、附件一一六頁）は、一九七五年にピエール・ガノーとジャン・ヴザンによって『メロヴィング期トゥールのサン・マルタン修道院の会計文書』と題して刊行されたところの、同修道院が農民からの賦課徴収用に作成した文書の伝存する断片二八葉を、徹底的に分析することを通じて、七世紀ロワール地方の農民世界を再現しようとした研究である。

この「会計文書」は単位所領ごとの農民名とその貢租負担額とを記載し、かつ徴収現場で記入された速記文字等を含み、文書史料の乏しいメロヴィング期の研究にとつて極めて貴重な存在と認められながらも、一旦廃紙として無造作に裁断して他の写本の装丁に用いられていたものが奇しくも再発見されたという、その無惨な伝存状

況と、他に同類の文書史料が皆無という扱い難さの故に、テキスト刊行後も、フランス本国においてもその内容の分析に取り組む研究者は現れなかった。佐藤氏が一九八四年、二回目二年間のフランス留学に赴いた到着直後に、テキスト校訂者ヴザンとの会話と、国立図書館での文書断片現物との対面を通じて、この断片を残した世界の歴史像を描き出そうとする——化石断片から恐竜の姿を復元する古生物学者のそれにも似た——研究意欲が掻き立てられた経緯を述べる、本書「あとがき」の言葉には人の心を打つものがある。以来一〇年余りを費やして完成したのが本書である。それは学界の注目を集め、五篇の書評が現れた。

本書は一章から成り、第一章から第三章までを第一部、第四章以下を第二部として括る形を取る。

第一部「聖人墓廟から修道院へ」において、「会計文書」を遺した母体であるサン・マルタン修道院そのものの成立過程を、ガリアにおける修道制の発展という大きな歴史の流れの中に位置づけて考察する。トゥール司教聖マルティヌス（三九七年没）はしばしば奇跡的治癒をもたらす霊能によって知られ、その墓所には祈願者が集まり奉仕者が住み着き聖堂が建てられて、バシリカ（墓廟）と称されていたが、七世紀になって、アイルランドから渡来した聖コロンバヌスの修道院刷新運動とこれに呼応する王妃バルティルドの強力

な支援によって、このバシリカが修道院に変身し、資産の自主管理を含む自律の特権を獲得するに至る経緯が詳しく語られる。

第Ⅱ部「『会計文書』の世界」のうち最初の第四、第五章は「会計文書」自体の精査考察に当てられる。それが冊子ではなくして単葉、台帳ではなくして徴収現場に携行する書面であり、年代は六七年から六八二年の間のものとはほぼ特定し得るなど、テキスト校訂者も言及し得なかつた事実を独自に考証する。そしてこの文書の背後には所領明細帳（ポリプティック）その他の書類が存在した筈であるとして、そのような書写技術がどこから来たかの系譜を探るといふ非常に専門的な問題について学識と識見を吐露する。

続く第六から第十までの五章は「分析と推論一―五」（各章副題つき）と題され、「会計文書」の内容分析を通じて歴史像を再現するという本書の本領とも言うべき作業が以下のような論述として展開される。

(1) 空間的枠組 所領单位名称として文書に現れるドムス、コロニカ、ヴィラ、サキオについて考察し、最も多数を占めるコロニカとはおおよそ一世帯から一世帯程度（例外的に最大二七世帯）の構成であり、これらが賦課徴収業務の拠点であるドムスに分属する構図が描き出される。文書に現れる個々の地名の現在地への比定についても、ガノー等の研究成果を跡づけ若干の独自の考察も加えて

綿密に叙述する。

(2) 賦課と農民経営 文書に現れるアグラリウムの語義をめぐって、他の史料文献の博捜を通じて、それが生産物十分の一の現物徴収であることを考証する。これを根拠として徴収量から生産量を逆算し、所在地を確定できるコロニカ（総数のほぼ三分の一）の逐一について、当地の穀物生産が幾ばくの人口扶養力を有するかを試算し、農民生活の実態を推量する。それは不確かな仮定を前提とする作業にならざるを得ず、大きな紙幅を費やす割りには実質的成果を挙げていない憾がないではない。しかしロアル中流域という同じ地域内でも、地点ごとに生業のありかたも多様で生活水準にも格差があったらしいことを、各地点の地理的環境をも丹念に考察に入れながら、具体的データに基づいて——幾段もの仮説的操作を経てではあるが——明らかにしたことの意味は大きいと言うべきである。

(3) 農業技術と農法 作物として小麦、大麦、スベルト小麦、ライ麦、燕麦が現れ、大麦・燕麦の三年輪作農法が特に小規模経営の農家において始まっていた形跡のあること、そして大規模経営においては商品として流通する小麦の作付けに集中する傾向があったことなどが論ぜられる。

(4) 社会構造 人名学の成果を応用して、羅列される世帯主名の

間に親子関係が推測されるものを拾い出すという斬新な手法を用いて農民の家族構成を考察する。女戸主が他の時代に比べて比較的少ないこと、結婚すれば十分な資産はなくても独立した世帯を持つという単婚家族への指向が強かったことなどが指摘される。

(5) 賦課徴収の実態 賦課徴収人が現地でどう振る舞い農民がどう対応したかを論ずる。前年度滞納分をめぐって、文書中にただ一例ながら「その存在を否認した」旨の速記記入が残されていることの中に、自立的な農民の卑屈でない姿が認められるとする。

最後の第十一章では、「会計文書」以外の史料に眼を向けて、上記「分析と推論」からの所見を大きな歴史の流れの中に位置づける考察がなされる。コロニカはローマ末期の自由農民コロヌスに由来する自立して個別経営を行う農民の定住形態であり、これに対する賦課は領主制的というよりは「国家的」、すなわち国家的賦課徴収権が教会へそして修道院へと移管されたものとして性格づけられる。時代が下って、七七五年にシャルルマーニュが、八六二年にシヤルル禿頭王が同じサン・マルタン修道院に与えた所領確認証文を見ると、そこには明らかに領主の直営地を中核とする経営体としての古典荘園制が現れており、「会計文書」の世界との間に断絶が認められるとする。著者は本書の「序論」において、八世紀以後を中世とするアンリ・ピレンヌ説等を引き、また最近の幾つかの国際研

究集会の動向を紹介して、七世紀を古代から中世への転換期と認める立場を取っており、この第十一章はそれと対応し、具体的な裏付けを提供する関係になっている。

以上のように本書は、誰も手を着けようとしなかった断片史料から、できる限りのものを引き出して歴史像を構成するという独創的な企画を、古文書学、古書体学の学識を駆使する綿密な史料分析と、国制史、教会史、地理学、農業技術史、農業経済史、度量衡史、人名学などにわたる学界最新の研究成果を独自の識見をもって活用する手法とを通じて達成した、きわめて特色ある著作である。その所論は概して、異論の余地のない証明というよりも、均衡の取れた推定の提示という性格を帯びる。挑戦した課題の性質上そうならざるを得ないのであり、結論を導く過程の手厚さにこそ本書の価値があると云うべきである。述べられた事柄はしばしば非常に込み入って面倒であるけれども、叙述のスタイルは平易で分かりやすく、人を歴史学的思考の面白さに引き込む魅力がある。稀有な史料の活用を通じて、西洋七世紀の歴史の研究の幅を広げるうえに大きく寄与した業績として高く評価される。